

胸に迫る土臭さ

32年ぶりの人形浄瑠璃文楽八戸公演が18日、八戸市公会堂でいよいよ開催される。文楽の地方公演は、毎年10月と3月、全国各地で開催されているが、青森県、特に八戸市での開催は本当に久しぶりである。このように



川守田礼子
八工大准教授

貴重な伝統芸能の鑑賞機会を与えてくださった主催者・関係各位に心より感謝を申し上げます。

人形浄瑠璃文楽は、江戸時代、大坂を拠点として花開いた芸能で、太夫と三味線弾きによる浄瑠璃と、諸国を放浪した操り人形芝居が合体して成立した。平曲や説経節な

18日、人形浄瑠璃文楽八戸公演

川守田礼子・八工大准教授寄稿



ど日本の芸能における語り物の歴史は長い。「物語象徴として身近に存在していることは、五生をなぞること」。いつの世でも人々の心を慰め、熱狂を生み、思索の種をまいてきた。

また、人形との関わりも古く、古代の土偶から子どもの玩具に至るまで、人形の関わり

で、人の幸せ、健康を祈る象徴として身近に存在している。そのせいか人形浄瑠璃文楽の舞台を拝見して、遠い記憶が呼び起さる。この土臭さ、野

宝生流能楽師の故近藤乾之助さんが「文楽では何となく野暮ったさが感じられるように思いますが、人形の遣い方、語り、舞台上で繰り広げられる戦いが素朴という

「すしやの段」は、そのように重厚な見応えのある作品である。続く四段目「道行初音旅」は、静御前の作品世界は、きつとある

迫力のある太夫の語り、情感豊かな三味線の音、そして人間以上に人間の生を浮き彫りにする人形のリアルさ。この三位一体の芸の素晴らしさをぜひ、直接劇場で味わっていただきたい。「情を語る」人形浄瑠璃文楽の作品世界は、きつとある

旅の一場面(いずれも青木信三氏撮影)

「義経千本桜」から三段目の「すしやの段」、四段目の「道行初音旅」、世話物文「新版歌祭文」としては「新版歌祭文」の「野崎村の段」がかかる。この二人は周りをおもんばかった結果、誰にも相談することなく孤独的ヒーローがさんせんと輝く桜のように全ストリーを貫く作品だが、義経は三段目「すしやの段」には登場しない。しかし、肉親に理解されない悲しみ、肉親に報いられない悲しみ、はかなく消える無念という、義経が抱えている悲しみが通底

八戸工業大感性デザイン学部准教授、文楽はち(かわもりた・れいこ)が味わえる。もう一点、今回の組み合わせを巧みだと思ふの(かむらた・れいこ)が味わえる。もう一点、今回の組み合わせを巧みだと思ふの(かむらた・れいこ)が味わえる。もう一点、今回の組み合わせを巧みだと思ふの(かむらた・れいこ)が味わえる。